
覚悟しいよ (^_^) /

国後旺

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

覚悟しいよ（^|^^）ノ

【Nコード】

N0497E

【作者名】

国後旺

【あらすじ】

十日前に東京に引っ越したショウタと、福岡に残されたショウタの彼女：ユリは、メールによる対話を始めた「ハズ」だ。（全四話）横書きでご覧下さい。十分程度で読破できる長さです。（ジャンル：ケータイホラー）

Re:その後

- - Eメール 1件 - -

ケータイ画面に表示されたその知らせを見て、シヨウタは受信メールを開いた。

送信者：ユリ

件名：Re:

本文：お！ ケータイ買ったんや

(*^|^*)

良かったわー(〒|〒)

やっと連絡とれるようになったね

これからは

毎日メールするけん!

覚悟しいよー(^|^)/

シヨウタはそのメールを読んで、安堵の溜め息をついた。そして、返信メールを打つ。

件名：Re2:

本文：お前こそ覚悟しろ(^|^)v

覚悟しいよ(^_^)/

送信。

興奮を抑えるために、シヨウタは自分の部屋のベッドにあお向けに倒れた。心臓の音が聞こえてくる。

シヨウタは小学六年生であり、思春期にあたる時期だ。そして、彼女も居る。それがユリ。

しかし、今よりも二ヶ月も前に、家の事情で引っ越し、ユリとも離ればなれになっていた。

ユリは福岡。シヨウタは東京。軽々と遊びに行ける距離ではない。

電話という手段はあったのだが、時間がかかる上に、切りたくないという思いから、つついっ長電話になってしまい、引っ越しから一週間で親から禁止令を出されていた。

しかし今日、シヨウタは必死の説得に結果、やっと親の了承を得て、ケータイを買って貰い、はれて連絡が取れるようになったのだ。

シヨウタはユリに逢えないことに歯がゆさを感じていたが、それも、これで少しは和らぐだろう。

シヨウタは、次のメールを待った…。

やり取り

シヨウタが東京に引っ越して一週間後のこと。

「ゴメンね、ユリ。お父さんがお金がかかるからダメって言うんだ」
そう言われたユリは、あまりのショックに、その後の話に耳を傾けることはできなかった。

ユリはシヨウタとの連絡手段を無くした。

否、本当に無くしている訳ではない。なぜなら、ユリから電話を掛ければ向こうは料金を払わずに済むからだ。

しかし、幼さ故^{ゆえ}が、その事実を二人は知らない。

ユリの家族はその事実を教えなかった。なぜなら、家族はユリがシヨウタと連絡を取れなくなった理由を知らず、「取れなくなった」ではなく、「取らなくなった」と勘違いをしていたからだ。

一方、シヨウタの父親もその事実を教えなかった。なぜなら、電話の向こうの相手…つまりユリに、シヨウタを奪われる気がしてならなかったからだ。

しかしユリは、新たな連絡手段の扉を、最後の電話を終える直前に作った。

シヨウタが別れを告げる直前、ユリは我にかえり、あることを言った。それは、ユリのケータイのメールアドレス。声を震わせながら、ユリは丁寧にその暗号を何度も繰り返し伝えた。

シヨウタはそれを電話越しに聞きながら、紙に書き記した。途中、鉛筆が何度も折れた。

そして、全てを書き記し、二人は別れを、

「ケータイを買ったら、メールをしてね」

「一番最初に送る。絶対」

「絶対だよっ！」

「うん」

告げた。

それから三日後の夕方。ユリのもとに一通のメールがきた。それは、知らないアドレスからだった。

ユリは少し不審に思いつつも、メールを開いた。

送信者： @ezweb.ne.jp

件名：(non title)

本文：シヨウタだよ！（^^）！

ケータイ買った〇（^^）〇

父上様を説得するの
大変やったわ（-|-;-）

ユリはベッドの上で飛び跳ねた。驚きと喜びを隠せていなかった。まさかこんなにも早く再会するとは、夢にも思っていなかったからだろう。

ユリは自らの高鳴る鼓動を感じながら、返信メールを打った。頬が若干赤い。

件名：Re：

本文：お！ ケータイ買ったんや

（*^|^*）

良かったわー（〒|〒）

やっと連絡とれるように
なったね

これからは

毎日メールするけん！

覚悟しいよー（^|^|^）ノノ

ユリは焦りながらも、なんとか打ち終えた。そのときの焦りが若干メールに現れていることに気付かず、そのまま送信した。

シヨウタのアドレスを記録して、次のメールを待った。

覚悟しいよ（^_^）ノ

数分後。　　ユリのもとに、返信のメールが届いた。

送信者：シヨウちゃん

件名：Re2:

本文：お前こそ覚悟しろ(^| ^)v

ユリは「覚悟しよう」と思った。

翌日の昼。　　ユリは学校に居た。そして今は昼休み。

ユリは、もしメールが届いていたら、他の子に見られたくないという思いから、女子トイレに入った。

そして、サイレントマナーモードにしておいたケータイのチエツクをした。

案の定、メールが届いている。シヨウタからだ。

それも、届いた時間は十二時半。今より一時間もまえだ。少し申し訳ない気がしてか、ユリは恐る恐るメールを開いた。

送信者：シヨウちゃん

件名：(non title)

本文：よ！ 元気？

俺は超元気だよ。(。()

勉強はドコモ難しい

覚悟しいよ(^_^) /

しゅん(――)

ユリは相変わらず

エリートかな？

なんてねー(――)

メールの内容を見て、ユリは笑う。そこにさっきまで居た不安は、どこかへ逃げていった。

件名：Re：

本文：おかげ様で(*^ー^*)

エリートだよー。

きらーん ふふふー。

勉強ね。だいじょーぶ！

シヨウちゃんは

やればできる子よ(――)

送信。

「シヨウちゃん……」

ユリは、ケータイを「ギュツ…」と、強く握りしめた。

ユリは教室に戻り、席にっていた。

覚悟しいよ(^_ ^)ノ

不意に、授業中じゃないため、通常マナーモードにしておいたケータイが震える。 ショウタからのメールが届いたのだ。

さつきまでは、他の子に内容を知られることを恐れていたが、その注意はショウタのメールの内容が知りたい思いでかき消されていた。

その姿が気になってか、ユリの周りに数人の子供が集まる。

その中、一人の女の子がユリに、「誰からー？」と訊いた。

話し掛けられたユリは少し驚いていた。どうやら、子供達が近づいていたことに気付いていなかったらしい。

「ショウタ君から、だよ」

質問されて答ええないのは流石に失礼だと思っただらしく、ユリは答ええた。

「ショウタから!？」

数人の中の、一人の男の子が声を張り上げる。

「なんやアイツ！俺にはなんも連絡ナシなのにー」

その男の子はショウタと仲が良い子で、ショウタとよく遊んでいた。

ユリもそれを知っていたから、一つの連絡も無いことに少々不自

然さを覚えていた。

しかし、その疑念はすぐ消えた。

「お前、ケータイ持ってないやん」

「あ、そうやったな。ははー、ウツカリしとったわ」

「アンタぐらいだよ、持ってないのは」

というやり取りを聞いたからだ。

「で、なんち（なんて）書いとる？」

「え？ えっとね……」

他の男の子が、メールの内容を知りたいと、目を輝かせる。ユリがそれに応じる。

この日からしばらく、こんなやり取りが続くことになる。

このやり取りこそが、ヒントであることに、ユリは最後まで気付けなかった。

やっぱり、そつちがいーよ。
ユリがおるけんね(^-^)

宛先：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：もー(^|^*)

そげん言つてから

浮気しとつたら

承知せんけんね(。・。(フフ

送信者：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：こわツ(。・。(！！

気をつけます(^|^(;

宛先：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：よし(*^|^*)

た。
という感じだ。それは毎日、ユリの中でエネルギーに変わって

覚悟しいよ(^_^) /

もう、依存症と言っても過言ではないだろう。今のユリにとってケータイは、まさに命の次に大切なモノになっていた。

話は変わるが、ユリはこの一年で大きく変化した。

正確に言えば、シヨウタがユリを変えたのだ。

それは半年前。ユリが六年生になったばかりの頃。

これから一年間を共に過ごす班を決める、クラス会議中のこと。

ユリの隣の席になったシヨウタが、ユリに話しかけた。

学年は上がったが、クラス替えはしていないため、ユリはシヨウタがどんな人物かはだいたい知っていた。

ユリは当時、今よりずっと内気でおとなしい子だった。そのため五年生のとき、ほとんどクラスに打ち解けることができていなかった。

一方、シヨウタは真逆の存在。彼を嫌う者はこの学校にはいないだろう…それほどまでに、彼は人に好かれていた。非常に明るく、クラスに笑いを産むのが得意だった。

ユリとはあまりに釣り合わない相手。

ユリもそう思っていたからだろう。本当に驚いていた。

そして、シヨウタは言った。

「エトウさん、だよな？ 隣り同士、仲良くしよっ！」

その微笑みに、その差し出された手のひらに、エトウ ユリは吸い込まれていった。

しかし、それはあくまでユリにとって信じられないことだっただけで、シヨウタはだいぶ前からユリのことを気にしていた。ただ、そのことにユリが気付いていなかった…それだけのことだった。

それからというもの、シヨウタはユリに付きつきりだった。そして、ユリもシヨウタの影響を受けて変わりつつあった。

「伝えたいことは自分で伝えなよ」

「もうちょっと前に出ないと。それじゃダメだよ」

「笑った方がいいって。絶対そっちの方が可愛いよ」

「ユリと一緒にだと、俺、すっごく嬉しくなるんだ」

たくさんの言葉を貰って、ユリは内気な性格が、少しはマシになった。笑顔を浮かべることができるようになった。友達ができた。シヨウタのことを、好きになった。

そして、言葉では貰えないモノも貰った。

ユリの頭の中には、もう、シヨウタしかいなかった。

覚悟しいよ (^_^) /

それでも気付けなかったのか。それとも、だからこそ気付けなかったのか…。

シヨウタが引越して、二ヶ月後の夕方。ユリは宿題を終わらせて、疲れたのか、眠っていた。

その時からだ。

このケータイに、彼のメールがくるようになったのは。

ユリは、着メロの音に気付いて目を覚まし、誰かからのメールが届いたことを知った。

それは、知らないアドレスからのメールだった。ユリは、その重い^{まぶた}瞼を開いて、「迷惑メールかな…？」と言った。この二ヶ月でユリは、多少の知識をつけていた。

そして、そのメールを開いた。

ユリは、ユリにとって不思議なモノを見た。そのメールの内容は、

送信者： @ezweb.ne.jp

件名：(non title)

本文：ゴメンね！

遅くなっちゃった（<|>）

ケータイ買ったぜ！

以上。

シヨウタからでした！

（^^） / またな！。

「どづいづ...こと...?」

ユリは、そのメールの内容を、信じることはできなかった。

それでも、何かが引つかかったのか、ユリは「シヨウちゃん」からのメールを読み返し始めた。 そんなことをしても、意味はないのに。

その馬鹿な行為は見るに耐えなかった。

だから私は、最後にもう一度だけ、メールを送ってやった。

ケータイから着メロが鳴る。

それはユリが今まで、ずっと大好きだった、音。

そしてユリは、たった今送られてきたメールを見て、困惑の表情を浮かべた。

送信者：シヨウちゃん

件名：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：Re2：

Re2：Re2：Re

本文：やっと気付いたんだね。

覚悟しいよ(^_^)ノ

残念！ 遅すぎたネ

タイムオーバー（@|@）

ユリがケータイをベッドに放り投げた。私はケータイ画面から、華奢で青白く、腕力のある腕を出して、ユリの顔面をカーペットに叩きつけた。

そして 私は ユリを

ユリの泣き顔は、今まで私に見せてくれた…どの笑顔にも負けな
いぐらい、最高に面白かった。

その後

その部屋には、数時間前まで人が居た為か、生活感が部屋全体に漂っていた。

しかし、その部屋には、誰も居ない。

暗闇の中で、着メロが鳴る。

その部屋のカーペットに、ポツンと一つだけケータイがある。恐らく、そこからの音だろう。

不意に、ケータイが開いた。開くはずがないのに。

- - Eメール 一件 - -

ケータイの画面が、新着メールを表した。

送信者： @ezweb.ne.jp

件名：(non title)

本文：ユリ？ もしかして、

届いてないかな？

ユリ。

俺、ケータイ買ったから。

もし、ユリじゃない…

違う誰かに送っていたと

覚悟しいよ(^_^)ノ

したら…

間違えました。

ごめんなさいm(´|´)m

ケータイ画面が、返信メールを表した。

宛先： @ezweb.ne.jp

件名：Re：

本文：お！ケータイ買ったんや

(*^|^*)

良かったわー(´|´)

やっと連絡とれるようになったね

これからは

毎日メールするけん！

覚悟しいよー(´|´)／

画面上に表示されたそれは、その宛先へと送られた。

その後、ケータイ画面はメモ帳に切り替わり、こっ記された。

送信者： @ezweb.ne.jp

件名：Re2：

本文：お前こそ覚悟しろ(´|´)v

覚悟しいよ(´_´)／

覚悟しいよ (^ _ ^) /

今度はキミの番だね、シヨウちゃん。

覚悟しいよ (^_^) /

e
n
d

その後(後書き)

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497e/>

覚悟しいよ(^_^) /

2009年3月24日08時54分発行